岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所　国際シンポジウム　参加無料・申込み不要

ターミナルケア いのちの真実を語る
―医療と仏教の実践を通して―

日時

2019年3月2日(土)
13:30～16:30

会場

岐阜聖徳学園大学
岐阜キャンパス 2号館3階 多目的ホール
〒500-8288　岐阜市中鶉一丁目38番地〈駐車場あり(無料)〉
TEL　058-278-0711
※カーナビゲーションで検索する場合は、上記の住所または電話番号を入力してください。

※荒田川の橋は大型車輛通行不可(幅員、重量制限あり)

パネリスト

釋 惠敏氏
台湾 法鼓文理学院学長

打本 弘祐氏
龍谷大学専任講師
浄土真宗本願寺派僧侶

小笠原 文雄氏
小笠原内科院長
真宗大谷派僧侶

服鳥 景子
本学看護学部准教授

コーディネーター

譲 西賢
本学教育学部教授
真宗大谷派僧侶

お問い合わせ

岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所(岐阜聖徳学園大学 学生課内)
〒500-8288 岐阜市中鶉一丁目38番地
TEL／058-278-0711　　MAIL／gakusei@shotoku.ac.jp

主催:岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所

岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所において、「ターミナルケア いのちの真実を語る−医療と仏教の実践を通して−」をテーマに国際シンポジウムを開催いたします。

約40年前に日本でのホスピス運動が始まり、それに刺激された仏教文化を背景とするビハーラ運動が始まりましたが、医療界や一般社会において、その認知度は低く、いまだ大きな流れになっていないという現状にあります。

医療と仏教は同じ「生老病死の四苦」の課題に取り組みながら、現在の日本の仏教・僧侶は生老病死の現場から遠ざかり、大多数の人々の生老病死に一番近くで関わっているのは医師、看護師等の医療従事者となっています。近年、日本の医学界において「死に往く過程」をどう生きるのか、「死」という現実をどう受けとめて「生きるか」が問題とされるようになり、それまで「死」を拒否する姿勢から「『よい死』を包括した医療へ」というパラダイムシフトが出てきたと聞きました。

そうした流れの中で、2018年には厚労省から「ACP(アドバンス・ケア・プランニング)」の愛称が「人生会議」に決定したとの報道がありました。ACPとは、人生の最終段階における医療・ケアについて、患者さんやご家族等や医療・ケアチームと繰り返し話し合う取り組みのことをいいます。少しずつそうしたケアの文化が育まれているようです。ここに日本のビハーラ活動は、医療者とどのように協働していくことが必要とされるのでしょうか。

このシンポジウムでは、医療の現場で「いのち」をケアする意義と課題について問いを投げかけていただき、仏教がどのような役割を果たしうるのか。今回は日本より先進的に仏教ターミナルケアに取り組み、多大な成果を残している台湾仏教界を代表して、法鼓文理学院学長 釋恵敏師に討議に加わっていただき、活動事例を紹介していただきます。参加された皆さまの新たな知見や気づきが生みだされる場になればと願います。

所長 河智 義邦

パネリスト

しゃく けいびん
釋 惠敏氏
法鼓文理学院学長

【略歴】
1954年生まれ。1979年に仏教僧侶として叙任。1975年に薬学の学位（台北医学大学）を取得し、1992年には東京大学から文学博士号を授与される。1994年から2006年にかけて、国立台北芸術大学において教授、学生部長、教務主事、学長代理として従事した後、国立台北芸術大学名誉教授、法鼓佛教学院、法鼓文理学院（Dharma Drum Institute of Liberal Arts）の学長として活動している。また2007年から、臨床佛学研究協会の常務理事、1998年から今まで中華電子佛典協會（CBETA）の主任委員として活動している。論文に「ホスピスケアに関わる臨床仏教宗教師の養成について―台湾のある医療センターにおける活動例―」（『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第16号pp.25-50）等がある。

【メッセージ】
英経済誌『エコノミスト』が5年ごとに発表する、クオリティー・オブ・デス（QOD、死の質）」世界ランキングの最新版（2015年）において、台湾はアジア1位、世界80カ国中6位を獲得しています。台湾では臨床仏教宗教師の養成が2000年から始まり、多くの僧侶が医療界と協働して、ターミナルケア実践に取り組んでいます。今回はある医療センター及び在宅(2010年～)、地域(2017年～)におけるターミナルケアの活動例をご紹介したいと思います。西洋のキリスト教的“全人的ケア”という概念が台湾に持ち込まれたとき、その身体的・心理的・社会的ケアとともに、スピリチュアルケアの必要性が強調されていました。これと対照的に、仏教ではいのちを、『四念処経』に説かれる身・受・心・法から成るものとみなし、“マインドフルネスのケア(Care of Mindfulness)”が台湾の臨床仏教宗教師養成プログラムのコアカリキュラムとなっています。

うちもと こうゆう
打本 弘祐氏
龍谷大学専任講師
浄土真宗本願寺派僧侶

【略歴】
専門は真宗学、社会学。龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得（文学修士）、桃山学院大学大学院社会学研究科博士後期課程応用社会学専攻修了（社会学博士）。あそかビハーラクリニック、慶徳会常清の里ビハーラ僧、桃山学院大学非常勤講師などを経て、2015年より現職。東北大学、龍谷大学の臨床宗教師研修にも携わる。論文に「ビハーラの展開と〈ビハーラ僧〉」、「医療における宗教的ケアとニーズをめぐって」他多数。

【メッセージ】
有限のいのちの私たちはこの世でいのちを終える場所としてどこを望み、どのようにいのちを終えて、どこへいきたいと願っているのでしょうか。そして、思い通りにならない私たちの有限のいのちに向けて、死では終わらない無限のいのちを伝えてきた浄土真宗は、どのようにいのちの問題を巡って苦しみ悲しむ当事者に関わっていこうとしているのでしょうか。それらを実践真宗学の立場からお伝えしたいと思っています。

お がさ わら ぶん ゆう
小笠原 文雄氏
小笠原内科院長
真宗大谷派僧侶

【略歴】
1948年 岐阜県生まれ。医学博士。日本在宅ホスピス協会会長。
名古屋大学医学部特任准教授。岐阜大学医学部客員教授。
1973年 名古屋大学医学部卒業。名古屋大学第二内科等を経て、平成元年 小笠原内科開業。2018年 小笠原内科・岐阜在宅ケアクリニック開設。
著書に「上野千鶴子が聞く。小笠原先生、ひとりで家で死ねますか?」（朝日新聞出版2013年）「なんとめでたいご臨終」（小学館出版2017年）がある。

【メッセージ】
在宅ホスピス緩和ケアを通じて、患者の生涯から多くの奇跡に出遇わせていただきました。67名の独居の在宅看取りの際、まるで死ぬ時を選ぶかのように旅立つ方、お仏壇に向かいながら最期をむかえる方。家に帰ると不思議な力が湧き、患者の心に灯がともります。やがてそれが希望という名の光となり、人に奇跡をもたらすのか。医療者として実践してきた「ホスピス」とは、いのちを見つめ、生き方・死に方、看取りのあり方を考えること。「ケア」とは、人と人とが関わり、暖かいものが生まれ、生きる希望が湧き、力がみなぎること。医療者として、患者のいのちを見つめてきた経験から、皆様と「いのち」について考えていければと思います。

はっ とり けい こ
服鳥 景子
本学看護学部准教授

【略歴】
神戸市立看護短期大学卒業
オーストラリア・シドニー工科大学看護学部 修士（臨床緩和ケア看護）
アメリカ・ハワイ大学マノア校看護学部 Ph.D.
国立大阪病院（現大阪医療センター）消化器内科病棟
山口大学医学部附属病院 放射線科病棟
日本訪問看護振興財団立刀根山訪問看護ステーション
山口大学医学部保健学部看護学専攻 助手
川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科 講師
2015年より現職（岐阜聖徳学園大学看護学部 在宅看護領域 准教授）

【メッセージ】
皆さまと共によりよく生きることについて考えてみたいと思います。ターミナルケアを受ける患者さんとそのご家族は、どのような状況を経験するのか、看護師の関わりも含めて実例とともにご紹介します。「死」と聞きますと一般的に暗いイメージがありますが、最近では「ハッピーエンディング」など積極的に前向きに捉える言葉も登場しています。『高齢者が考える「よい死」とは何か?』という私の研究において、500名を超える高齢者および、実際に高齢家族の「よい死」を経験されたご遺族は何を語られたのかをご紹介するとともに、本人が家族や医療・ケアの関係者と事前に繰り返し話しあうACP（アドバンス・ケア・プランニング）の重要性についても考えてまいります。

コーディネーター

ゆずり さい けん
譲 西賢
本学教育学部教授
真宗大谷派僧侶

1953年生まれ　岐阜県在住

【現職】
真宗大谷派大垣教区第6組慶円寺住職
岐阜聖徳学園大学 教育学部学校教育課程学校心理専修 教授
岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所兼任研究員

【略歴】
名古屋大学教育学部 教育心理学科卒
名古屋大学大学院 教育学研究科教育心理学専攻 博士後期課程満了

【社会的活動】
臨床心理士

【著書】
『暮らしに役立つ真宗カウンセリング術』 法蔵館
『今、ここに生きる歓び』 法蔵館
『自分の「心」に気づくとき』 法蔵館
『神も仏も同じ心で拝みますか』 法蔵館
『ベーシック心理学』 医歯薬出版
『ガイドライン　学校教育心理学』 ナカニシヤ出版　等